

## 花の歌

## 歳時記

前田康子

子どもの頃は、いたるところに廃屋があった。それを見て学校で、お化け団地とかお化け工場とかいろいろな噂が広まると、たちまちそこを通るのがこわくなる。

閉鎖された工場は窓ガラスが割れ、のぞくと魍魎が蠢いているような不気味な雰囲気だった。お使いに行くのも、そろばん塾に行くのもそこを通らなければ行けない。ある秋の日、その工場のまわりに、どおっとセイタカアワダチソウが咲いていた。

通るのが恐かったその道も、壁のように生えたセイタカアワダチソウの黄色で何とか通れる道になった。習ったばかりの縦笛をふきながら、そこを通った。

どうして春や夏や秋や冬があるのか、子どもの頃不思議でならなかった。団地の一番上の階まで一気に登って高い秋の空を眺めた。誰とも話さずに、空を見ているだけの時間がずっと続く気がした。



絵・ジュズダマ／小柳吉次

## コスモス

「秋桜」と書いてコスモス。白、紫、ピンク、チヨコレート色もある。コスモスほど風を微妙に受けとめる花はない。不安気に、ときにはくすくす笑うように揺れ合う。メキシコ原産だが、すでに日本の秋の景色の一つになっている。コスモスを植えて迷路を作ったり、広い花畑にしたりと、観光スポットの一つにしているところは多い。

秋風はさざ波の風 海草のような葉のなか揺れるコスモス

俵 万智 かぜのてのひら

この歌のとおり、いわれてみればコスモスの葉は海草のようななじやもじやとした形をしている。すると花に囲まれて立っていると、そこは深い海であるかのような錯覚をおぼえる。

コスモスの花咲けば花を越ゆる風あな冷や冷やと鉄ひびきする

高野公彦 汽水の光

コスモスの花を渡ってくる風。その風は冷え冷えとした金属的な風と作者は捉える。そういうばこんな歌もあった。

ひまわりは木管楽器コスモスは金管楽器  
風に響り合ふ

黒木三千代 クウエート

風に揺れ、花と花が互いにぶつかりながら、音を奏でているとしたら、鉄琴のような透き通った音を私は思い浮かべる。リズムカルに遠くで近くで鳴り響く音。

コスモスの群れ咲く上を宙吊りの鉄骨が  
よぎる円を描きて

大島史洋 幽明

クレイン車か何かが鉄骨を連んでいる。その下に咲いている一群のコスモス。その黒い鉄の塊とコスモスの花がまったく別々のものでありながら、これがよくある現実の風景であるのも確かだ。

コスモスの歌は数多くあるが、「秋桜」と表記するものはあまり見かけない。やはり文字の取り合わせが詩的過ぎてしまうのか。



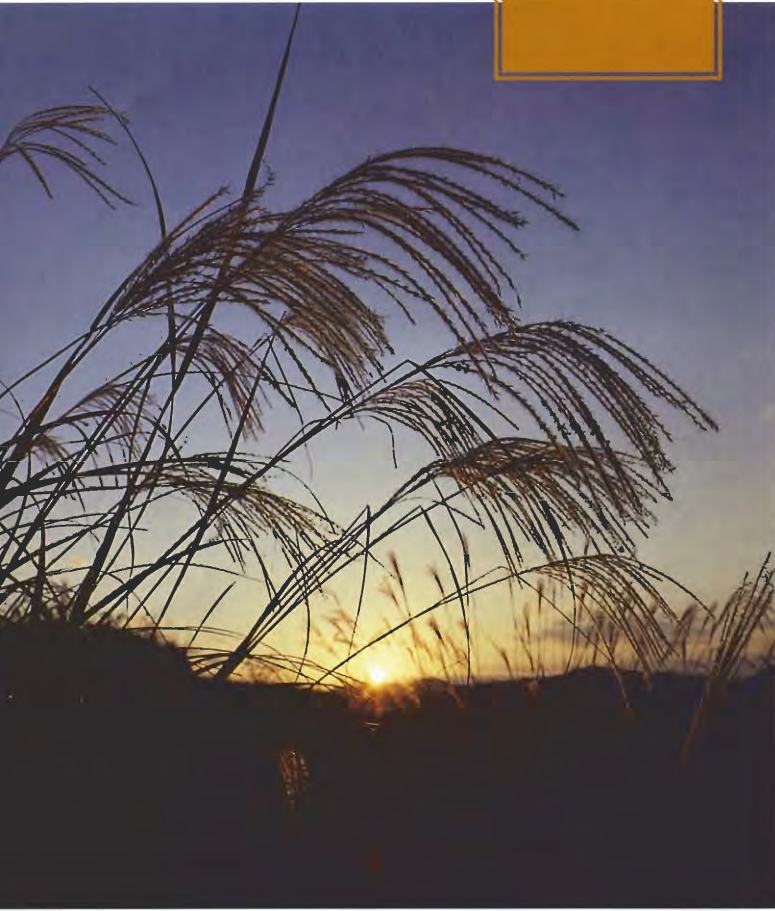
コスモス

## すすき

植物図鑑を開いたら、他の色とりどりの花とは違って、薄や荻の真にはふわーっと風が吹いている。薄を撮るとき、風も一緒に写っているのである。

土手を通ると、何をするわけでもないのに長い薄を一本折り取ってしまう。まだ若い花

## すすき



穂だどつやつや光っている。もつと時間の経っているものだと広がって白く獣のしっぽのようになっている。

飛行士の足形つけてかがやける月へはろばる尾花をささぐ

香川ヒサテクネー

現代風、お月見の歌。飲料水の会社が、抽



選で宇宙旅行が当たるといふ広告をつい最近出した。信じられないようななしかし、今の時代ではあたりまえのような出来事である。夢が叶うと同時に夢が少しづつ減っていつてしまう。

薄なすゆるる心をたちきて秋熱爛の酒を叩るも

佐佐木幸綱「呑牛」

薄がさわさわと揺れる夜は、ぼんやりと自分の世界に入って何時間でも物思いにふけてしまう。食べ物も飲み物も、一番おいしい季節である。

台風のと、刈り取り前の稲や薄がぼつかりと根元から倒れていることがある。自然の威力にふと驚かされる一瞬だ。

へりコプター敵地に降りてなびくすすき  
いだく悲しみのすき透るまで

近藤芳美「黒豹」

真上から見ると一面髪の毛のようになびく薄。旋回するへりコプターの羽の音に、脅える人々。三十年以上経った今でも、枯葉剤の後遺症に苦しむベトナム戦争の歌。

## 吾木香

吾木香の花の色が懐かしいと思うのは、子供の頃着ていた、ベストの色だからだった。吾木香の花は触ると乾いた感じだが、色だけ

だと毛糸のような暖かい、深い色をしている。

人を瞬かすほどの歌なく秋の来て瘦吾亦紅  
それでも咲くか

齋藤 史「秋天瑠璃」

吾木香はドライフラワーによくする。ひよろひよろの花が余計に細くなり、たくさんドライフラワーにしても少しの量にしかならない。それでも捨てるのは惜しい気がして、壁に長く吊るしてある。

吾木香あはれや花のたく、ひとも見えず淋しく秋の野に咲く、

原 阿佐緒「涙痕」

以前、新・秋の七草を決めるという企画があった。その時、吾木香が一番人気があった花だった。中には本来の七草に入っていると思っている人もいた。花らしくない花なのに人々の心を魅了する花である。

吾木香すきかるかや秋くさのさびしき  
きはみ君におくらむ

若山牧水「別離」

寂しさをぎゅうつと詰め込んで咲いているような吾木香の花の色。絵の具の筆で点々と描いたような花が、野原をじっと見つめると見えてくる。